

北斗句会作品集

(北斗会 HP 掲載分)

(2018) (2025)
「平成30年～令和7年 北斗句会作品集」

(2019) (2025)
「平成31年～令和7年 自薦三句」



はじめに

北斗会ホームページが開設されたのは平成 30 年 9 月でした。平成 31 年に防大で行われる行事「ホームカミングデー2」(67 期生の入学式に 60 年前に入学した 7 期生が招待される企画)に参加することが決定し、この行事に向けて 7 期生としての準備の一環としてホームページの開設が計画されました。

9 月に開設しましたが、北斗句会(俳句同好会・石田潔君主宰)の定例会の作品集を掲載するまでの準備に時間を要し、平成 30 年 11 月初めて掲載という運びになりました。以降毎月 1 回開催の北斗句会定例会の作品集及び年 1 回毎年 7 月に開催される北斗会総会・懇親会時出席者に配布される「自薦三句」(句会会員のそれぞれのその年の優秀作三句を纏めた作品集)を掲載することとしました。

この度北斗会解散を契機に「北斗句会」も解散することになりました。そこで、これまで北斗会ホームページに掲載した定例会作品集及び自薦三句を纏めて長年にわたる北斗句会の活動の証として残したいと思い、本「北斗句会作品集(北斗会ホームページ掲載分)」を作成しました。

収録した作品集は平成 30 年 11 月から令和 7 年 7 月まで 8 年間の「定例会作品集:81」及び毎年 1 回発行の「自薦三句(令和 2 年を除く):6」の計 87 です。

北斗句会は平成 15 年 3 月「一水句会」として発足。以後毎月第 1 水曜日開催され、平成 25 年 10 月にこれまでの作品を纏め「合同句集 北斗」(A4判 440 ページ 北斗会 HP の「北斗句会」のページに収録)を発刊しました。これを機に句会の名称を「北斗句会」に改めました。以後も毎月 1 回水曜日開催し、コロナ禍(令和 2 年、令和 3 年)に在っても通信(メール)句会なるものを工夫し 1 回の休みなく毎月 1 回の定例会を継続して発足から令和 7 年 7 月まで計 266 回の句会を開催するという他の期に類を見ない同好会活動でした。

～北斗句会のその後～

北斗句会はいったん解散しましたが、その後俳句同好会では竹内君と藤田君が中心となって句会の存続を図り、集合して座談をするような句会ではなく通信句会として句会を再立ち上げしました。

石田主宰の退任後、藤田紀潮、竹内雲泉、川崎きごうの三人が交代で主宰を務め北斗句会(通信句会)としては健在です。中心的な存在でした紀潮氏は早逝しましたが、8年8月第278回の北斗句会が開催され、本年の自選三句も纏まっています。令和 7 年 8 月以降北斗句会定例会の作品集は北斗会 HP に掲載していませんが、本年の自薦三句は北斗会ホームページに掲載される予定です。

(石田君談:中村君の奥様で俳句ベテランのかよ様が入会され、句会も盛り上がっています。

「俳句は知恵の戦いです。戦いはあの世に行くまで続きましょう。」)

北斗句会作品集目次

□平成 30 年 ・

3 ページ

○11 月定例会 ○12 月定例会

□平成 31 年及び令和元年

4～9 ページ

○1 月定例会 ○2 月定例会 ○3 月定例会 ○4 月定例会 ○5 月定例会
○6 月定例会 ○7 月定例会 ○8 月定例会 ○9 月定例会 ○10 月定例会
○11 月定例会 ○12 月定例会 ●令和元年 自薦三句 10 ページ

□令和 2 年 ・ ・

11～16 ページ

○1 月定例会 ○2 月定例会 ○3 月定例会 ○4 月定例会 ○5 月定例会
○6 月定例会 ○7 月定例会 ○8 月定例会 ○9 月定例会 ○10 月定例会
○11 月定例会 ○12 月定例会

□令和 3 年 ・ ・

17～22 ページ

○1 月定例会 ○2 月定例会 ○3 月定例会 ○4 月定例会 ○5 月定例会
○6 月定例会 ○7 月定例会 ○8 月定例会 ○9 月定例会 ○10 月定例会
○11 月定例会 ○12 月定例会 ●令和3年 自薦三句 23～24 ページ

□令和 4 年 ・ ・

25～30 ページ

○1 月定例会 ○2 月定例会 ○3 月定例会 ○4 月定例会 ○5 月定例会
○6 月定例会 ○7 月定例会 ○8 月定例会 ○9 月定例会 ○10 月定例会
○11 月定例会 ○12 月定例会 ●令和4年 自薦三句 31～32 ページ

□令和 5 年 ・ ・

33～38 ページ

○1 月定例会 ○2 月定例会 ○3 月定例会 ○4 月定例会 ○5 月定例会
○6 月定例会 ○7 月定例会 ○8 月定例会 ○9 月定例会 ○10 月定例会
○11 月定例会 ○12 月定例会 ●令和5年 自薦三句 39～40 ページ

□令和 6 年 ・ ・

41～46 ページ

○1 月定例会 ○2 月定例会 ○3 月定例会 ○4 月定例会 ○5 月定例会
○6 月定例会 ○7 月定例会 ○8 月定例会 ○9 月定例会 ○10 月定例会
○11 月定例会 ○12 月定例会 ●令和6年 自薦三句 47～48 ページ

□令和 7 年 ・ ・

49～52 ページ

○1 月定例会 ○2 月定例会 ○3 月定例会 ○4 月定例会 ○5 月定例会
○6 月定例会 ○7 月定例会 ●令和7年 自薦三句 53～54 ページ

平成 30 年

北斗句会

北斗句会 十一月定例会（五日、偕行社、兼題「風」「虫」）

五十音順 巻は特選 石田きよし選

巻 師の墓をつつむ静寂（しじま）や虫の声

深見十萬

巻 たまきかに佳きことひとつ返り花

藤田紀潮

巻 夕映えの東京湾や虫しぐれ

山縣秀雄

愛らしき仏の貌や秋遍路

大崎石州

新蕎麦の香に誘（いざな）はる深大寺

太田黒幸風

一雨に色を深めて秋気澄む

大森康政

風邪の朝（あした）ほのぼの上がる粥の湯気

川瀬 亮

秋風やしばし帚と庭に立つ

竹内雲泉

月今宵むかし話に耽（ふけ）りをり

田中資凡

蟻蛄（けら）鳴くや習いたてらし二胡のひと

長池豆陽

成田路に機影見送る彼岸花

速水紫洲

秋さくら雨にもめげず笑顔かな

宮下ひかる

朝まだき寒風類に舫とく

森田光彦

秋の風波の調べを運びけり

吉岡誠山

瞬の間の象の逆立ち秋うらら

石田きよし

北斗句会

北斗句会 十二月定例会（五日、偕行社、兼題「枯」「鍋」）

五十音順 巻は特選 石田きよし選

巻 寄鍋に上下のへだて煮込みけり

大崎石州

枯葉舞ふ秩父の里に笛の音

太田黒幸風

加速して過ぎ去る日々や晦日蕎麦

大森康政

巻 風になほ応ふる力枯尾花

川瀬 亮

巻 山茶花や黒衣の人とすれ違ふ

竹内雲泉

蘇る小春の表中はがきかな

田中資凡

巻 軟着の術知らぬらし朴落葉

長池豆陽

木枯と共に逝きたる友偲ふ

速水紫洲

木枯の海より迫る湊かな

深見十萬

牡丹鍋仕留めしひとの怪気炎

藤田紀潮

枯蓮や忍ばずの池忍ばせる

宮下ひかる

旅人と長き影ゆく枯野かな

森田光彦

雪吊の逆さに映ゆる水面かな

山縣秀雄

冬枯れの芝目に残るクラブあと

吉岡誠山

どの目にも海光宿る柳葉魚かな

石田きよし

平成 31 年



北斗句会 一月定例会 (九日 偕行社 兼題「冬」「年」)

五十音順 巻は特選 石田きよし選

なにこそ妻の初髪いとまふし

大崎石州

静寂を破る一閃初日の出

太田黒幸風

三代笑まふ家族の賀状の來

大森康政

うつし世をもう一巡り返り花

川瀬 亮

ふるさとの想ひ語らふ味噌雑煮

竹内雲泉

巻 存念のポインセチアを玄関に

田中資凡

「樗立て」の声渡りくる初日かな

長池豆陽

冬の月遮るもののなかりけり

深見十方

巻 長和殿へ折なす列の淑気かな

藤田紀潮

潮風や大仏裏の冬桜

宮下ひかる

巻 冬銀河荒波寄する竜飛崎

森田光彦

山茶花の白の極まる仏間かな

山縣秀雄

三ヶ日史書紐解きて明日を問ふ

吉岡誠山

居酒屋の置きどころなき冬帽子

石田きよし



北斗句会 二月定例会 (六日 偕行社) 兼題「寒」「雪」

五十音順 巻は特選 石田きよし選

御供物を相伴したる寒がらす

大崎石州

群れをなし孤高の境地水仙花

太田黒幸風

瀬戸物の厨の音の寒さかな

大森康政

巻 愛らしく鳴いては成さぬ猫の恋

川瀬 亮

通るたびひとつふたつと冬芽起つ

竹内雲泉

巻 春立つや百杭ひかる船溜り

田中資凡

立たされし風の廊下や冬木怪

長池豆陽

図書館の日溜りに濃き冬重

深見十方

巻 寒の水ほして新たにす決意

藤田紀潮

雪催ひ一枚着込む旅の宿

宮下ひかる

春寒や更地となりし喫茶店

森田光彦

竹林の節の白さや寒に入る

山縣秀雄

抜き付けの一刀試す寒の明

吉岡誠山

俘虜のごと残る白菜縛らるる

石田きよし





北斗句会 三月定例会（六日 偕行社） 兼題「春」「梅」

五十音順 尊は特選 石田きよし選

春一番野辺に恋する仁王尊

大崎石州

癒さるる京の言の葉ひなまつり

太田黒幸風

美術展の余韻と帰る春の風

大森康政

荒々しされど気の済む春一番

竹内雲泉

記念艦みかさに立つや鳥雲に

田中資凡

尊 好日や杖を放ちて青き踏む

長池豆陽

尊 春めくや茶席の菓子の淡き紅

深見十万

尊 逆光の礫となりて初雲雀

藤田紀潮

川沿ひの梅の香の呼ぶ盛りかな

宮下ひかる

梅が香や久しき友の便り来る

森田光彦

草陰の踏まれさうなる路の臺

山縣秀雄

友逝きてメンバー足りぬ春の雪

吉岡誠山



鉢の梅連れ合ひといふ他人かな

石田きよし



北斗句会 四月定例会（三日 偕行社） 兼題「風」「蝶」

五十音順 尊は特選 石田きよし選

桜散る南無々々となふ翁かな

大崎石州

四時に覚む春眠の快今いつこ

太田黒幸風

中空へ追ひつ追はれつ蝶の恋

大森康政

窓際にまどろむ妻の目永かな

竹内雲泉

尊 乾門抜けて名残りのさくらかな

田中資凡

尊 能笛の切り裂く闇や花吹雪

長池豆陽

墨堤の人混み分けて桜東風

深見十万

尊 初蝶のまとふあえかな光かな

藤田紀潮

風光る三十三寺巡りけり

宮下ひかる

うへしたへみぎへひだりへ対の蝶

森田光彦

公園の鎮もる水面鳥帰る

山縣秀雄

初蝶や詣でし人の集ひたる

吉岡誠山



蜜声も裏声もあり猫の恋

石田きよし

令和元年



北斗句会 五月定例会（八日 偕行社） 兼題「花」「餅」

五十音順 特選 石田きよし選

八重桜前のめりなる老い木かな

大崎石州

春愁や我に縁なき十連休

太田黒幸風

特選 桜葉降る八十路の港出でにけり

大森康政

子はすでに孫もつ齡柏餅

竹内雲泉

柏餅食ふたび母のそこにあり

田中資凡

クレヨンの能はぬ色や春の青

長池豆陽

葉桜や参道の店静もれり

深見十万

武者人形四暗刻の単騎待ち

藤田紀潮

地平線まで菜の花の黄一面

宮下ひかる

特選 芝桜彼方に富士の嶺白し

森田光彦

特選 のどけしや古刹の廊下きしむ音

山縣秀雄

亡きひとをふと思ひ出す君子蘭

吉岡誠山



この壺をめぐる戦や花筏

石田きよし



北斗句会 六月定例会（五日 偕行社） 兼題「雨」「日」

五十音順 特選 石田きよし選

夏の日やガイドに魅かる小谷城

大崎石州

もう一步踏み出す力更衣

太田黒幸風

夕間暮れ闇に染み込むせみ時雨

大森康政

特選 梅雨空や奥から傘と妻の声

竹内雲泉

髪束ねうなじの白き妻の初夏

田中資凡

木下闇光の欠片こぼれをり

長池豆陽

特選 五月雨や濁りし川の舳船

深見十万

合掌の小さき地蔵や吉の花

藤田紀潮

街を行く八十路をまもる片かけり

宮下ひかる

特選 暑き日や麒麟の影の動かさる

森田光彦

梅雨晴の車窓となりぬ伊吹山

山縣秀雄

広がり競う投網や余花の雨

吉岡誠山



はつなつの群青の湖風もまた

石田きよし



北斗句会 七月定例会 (三日 偕行社) 兼題「青」「祭」

五十音順 特選 石田きよし選

瓜食めばシルクロードの香りかな

大崎石州

梅雨寒やシャッター街の靴の音

太田黒幸風

道草のおやつは実梅秘密基地

大森康政

夏瘦せて朝餉の椀に味噌の濃さ

竹内雲泉

明日咲くと寝室に置く百合の壺

田中資凡

杖解きし脚の自在や揚羽蝶

長池豆陽

老若の無言でぐるぐるの輪かな

深見十万

うす雲に影をやどして梅雨の月

藤田紀潮

青葉から元気頂き三万歩

宮下ひかる

青蘆の叢に朽ちたる和船かな

森田光彦

木道に聞き耳たてる水芭蕉

山縣秀雄

子らも知るひと月近く啼く蟬を

吉岡誠山

遅れたるをそこ日傘をさして来る

石田きよし



北斗句会 八月定例会 (七日 偕行社) 兼題「夕」「水」

五十音順 特選 石田きよし選

陽炎へるタクラマカンの平沙かな

大崎石州

七夕や未だ追ふ夢句に託す

太田黒幸風

闇を混ぜ流螢闇を深めけり

大森康政

少しづつ癒ゆる手応へ花カンナ

川瀬 亮

清正を偲びつつ汲む宮清水

竹内雲泉

雲の峰ただ坦々とオホーツク

田中資凡

一湾を包む夕風潮満てり

長池豆陽

暗闇に江戸風鈴の音かすか

深見十万

大仏のわきに居座る炎暑かな

藤田紀潮

夕月が庭に魅かれて眠気去る

宮下ひかる

晩鐘の古都鎮もれり大夕焼

森田光彦

観覧車夕焼雲に呑みこまる

山縣秀雄

南風背に貯水池超えてフエアウエイ

吉岡誠山

比島より父帰還せし大夕焼

石田きよし

北斗句会

九月定例会（二日 偕行社）

兼題 実 踊

五十音順

特選 石田きよし選

枝豆を飛ばしつこして鳥を呼ぶ

大崎石州

兄が逆き順繰り上がる秋の蝶

太田黒幸風

三つ栗の孵化の如くに毬を割る

大森康政

空地ながむ中止されたる盆踊

竹内雲泉

盥 濁きたる蚯蚓の軀朝の黙

田中資凡

盥 樟の香や踊り浴衣のたみ皺

長池豆陽

嫋嫋と胡弓の余韻風の盆

深見十方

何もせて生きて八十路や酔芙蓉

藤田紀潮

盆踊り十年ふりにめぐり合ふ

宮下ひかる

コロナ禍や踊り中止の回覧板

森田光彦

盥 夕月夜長椅子ひとつ出されをり

山縣秀雄

伍勤兵長殿の小隊支那の秋

古岡誠山

盆東風を入るる下りの湖西線

石田きよし

十月定例会（七日 メール句会）

兼題 「星」「蟬」

五十音順

特選 石田きよし選

かなかなの水面にこだま中禪寺

大崎石州

赤い羽根令和に生きる遺産かな

太田黒幸風

盥 ひぐらしの呼び込む夜の帳かな

大森康政

伏す前の妻丹精のコスモス咲く

竹内雲泉

山門を跨ぎ九月の雨を聞く

田中資凡

盥 切れ効かせ逸る調べのつくつくし

長池豆陽

盥 日輪を追ふて色づく酔芙蓉

深見十方

盥 小鳥来る大道芸のジャグリング

藤田紀潮

天の川故郷の空に安んずる

宮下ひかる

安曇野や流星を待つ夜もすがら

森田光彦

夕映えの中に溶け込む熟柿かな

山縣秀雄

ひぐらしや地獄のぞきに拝観料

古岡誠山

いばむしり見得切るやうに貌まはす

石田きよし



北斗句会

十一月定例会（四日 メール句会）

兼題 「虫」「栗」

五十音順

特選 石田きよし選

穂栗のつくねんとしてけふも雨

大崎石州

鈴虫のソプラノ響く峠の宿

太田黒幸風

一村の白昼締まる鉦叩

大森康政

夜の厨隅に陣どるちちろかな

竹内雲泉

秋の夜や朝刊ひらき爪を切る

田中資凡

声明や紅葉降りしく平林寺

長池豆陽

満天に届けとばかり虫すだく

深見十萬

薦もみじ地層の秘める太古かな

藤田紀潮

行く秋や思ひ思ひの羊雲

宮下ひかる

宿坊の闇を深めて鉦叩

森田光彦

常連の減りゆく集ひ秋しぐれ

山縣秀雄

趣味高じ飼育始める虫鳴けり

吉岡誠山

夕映えを叩き釣り上ぐ紅葉鮎

石田きよし



北斗句会

十二月定例会（二日 メール句会）

兼題 「葉」「焼」

五十音順

特選 石田きよし選

早朝散歩イヴモントンの枯葉

大崎石州

コロナ禍にエールを送る酉の市

太田黒幸風

コロナ禍や津々浦々の隙間風

大森康政

サクサクと落ち葉踏む音背が聞く

竹内雲泉

くつさめも咎める世なり車内の眼

田中資凡

夕と宵狭間を仕切る冬の星

長池豆陽

掃き溜し枯葉を散らかるつむじ風

深見十萬

憂国の血潮めきたる冬夕焼

藤田紀潮

焼き芋の稚児と頬張る甘さかな

宮下ひかる

丸き背の喪服に長き木の葉髪

森田光彦

短日や沈む夕日を追ひかけて

山縣秀雄

光秀の御霊神社や虎落笛

吉岡誠山

くるくると時計まはりに鳴る恋

石田きよし



令和元年 自薦三句

北斗句会

北斗句会 自薦三句 (令和元年)

(五十音順)

ふところ 石田 木よし
ちちはの墓碑ふところ山眠る
この堀をめぐる戦や花筏る
俘虜のごと残る白菜縛らる
オンザロック 大崎 石州
八重桜前のめりなる老い木かな
早く打て蚊が尻立てる類つべかな
温泉上がりのオンザロックや宵の秋
彼岸花 似合ふ 銀座 太田 黒幸風
夕闇に歯をくり火しめくや彼岸花
炎 昼に歯をくり火しめくや彼岸花
令和 春風や余韻と 大森 康正
諸人の祝ふ去る日々や晦日蕎麦
加速して過ぎ去る日々や晦日蕎麦
猫の恋 川瀬 亮
愛らしき鳴いては成さぬ猫の恋
庭を掃く秋の深き賀状書く
雪鳥 竹内 雲泉
雪鳥やこの日ひと日を生き延びる
鳴けるだけにつくつく法師なき尽く
ポインセチア 田中 資凡
存念のポインセチアを玄関に
乾門抜けて名残りのさくらかな
鯉 堀 みて少年の白き脛

北斗句会

好日 長池 豆陽 かな
夕日ごと釣り上げ 鯉の連珠 かな
月白や炙り出さる 青き磯の波
好日や杖を放ちて 青き磯の波
傘 壽 遠水 紫州
風薫る傘 壽となりて 家族の枕
枇杷の実をむくやは 逝きたる友 偲ぶ
木枯らしと共に 逝きたる友 偲ぶ
音色 深見 十萬
三味の線の色くぐもる 薄暑かな
冬の月遮るものなかり 淡き紅
春めくや茶席の菓子 淡き紅
返り花 藤田 紀潮
身の丈に生きてゐるなり 吾亦紅
たまさかに佳きことひとつ 返り雲 雀
逆光の礫となりて 初雲 雀
雪 地 平線 宮下 ひかる
雪沿ひの梅の一枚 着込む旅の人
川沿ひの梅の一枚 着込む旅の人
菜の花や地 平線 着込む旅の人
竜飛崎 森田 光彦
冬 銀河 白波 寄す 竜飛崎
春 寒や更地に 富士の嶺 白
芝桜 遠く 富士の嶺 白
史書 吉岡 誠山
秋の風波の調べを 選り 思ふ
三が日は 史書の紐を 解き 春の雪
待ち人は 姿を 見せず 春の雪
東京湾 展望 山 秀雄
霧 深し 展 望 山 秀雄
夕映えの 東京湾 廊下 音
のどけしや 古利の 廊下 音

令和 2 年



北斗句会

一月定例会（八日 偕行社） 兼題「初」「枯」

五十音順 特選 石田きよし選

特選 富士と競ひあげくの果ての枯すすき

大崎石州

支え合ふ絆しみじみ除夜の鐘

太田黒幸風

庭手入れ焚火に菊の香りかな

大森康政

宣告の余命冬至の過ぎにけり

竹内雲泉

存分に母の味なる味噌雑煮

田中資凡

特選 二度もまあ五輪近づく老の春

長池豆陽

特選 氏神の石段高し大旦

深見十方

然はされど蜜柑のすじをとりながら

藤田紀潮

元気なり俺もお前も枯すすき

宮下ひかる

初日射す三河路雲のひとつなし

森田光彦

定位置のホームで迎ふ初電車

山縣秀雄

餅つきの庭や壺中の天地めく

古岡誠山



寒北斗かはたれ時の点と線

石田きよし



北斗句会

二月定例会（五日 偕行社） 兼題「寒」「梅」

五十音順 特選 石田きよし選

八十にずいと踏込む返り花

大崎石州

床の間の備前の壺や寒椿

太田黒幸風

鶏鳴に一村緊まる寒の入

大森康政

幼児の手袋ひとつ砂場脇

竹内雲泉

特選 夫婦して巡る御苑や春近し

田中資凡

寒禽に喰い荒らされし畑の點

長池豆陽

特選 長々と貨物列車や寒波来る

深見十方

探梅や見知らぬひとと懇ろに

藤田紀潮

臘梅の天を背にしてひらきけり

宮下ひかる

特選 寒月や人影絶えし渡月橋

森田光彦

湯上りにこくと一気寒の水

山縣秀雄

チバニアン彩り添へる寒椿

古岡誠山



双子には二つの行く手姫椿

石田きよし



北斗句会

三月定例会（四日締切・メール句会） 兼題「風」「雛」

五十音順 特選 石田きよし選

雛飾り寂しく食うやふたり飯

大崎石州

切り捨てて爪や髭まで伸びる春

太田黒幸風

雛たちの語る家族の歴史かな

大森康政

春愁や群れを外れし鳩一羽

竹内雲泉

寒明けや物産展の皿うどん

田中資凡

春耕や転ぶ幼虫真珠色

長池豆陽

春かなしマスクマスクの人の波

深見十萬

くつさめに集中砲火めく視線

藤田紀潮

ウォーキング雛人形に導かる

宮下ひかる

古雛を飾る中馬の町屋かな

森田光彦

車椅子回り道して梅祭

山縣秀雄

遠富士や風を背にして鳥帰る

吉岡誠山

朝刊にたたまれてゐる余寒かな

石田きよし



北斗句会

四月定例会（メール句会） 兼題「鳥」

五十音順 特選 石田きよし選

たのもしや土管の中の巣立鳥

大崎石州

春愁や硝子に映る八十翁

太田黒幸風

鳥帰る夕陽に比島烈士の碑

大森康政

有らなくに花と見紛ふ春の雪

竹内雲泉

暖かや蹴る子駆ける子弾ける子

田中資凡

菜の花や天心目指す飛行雲

長池豆陽

咲き誇る桜並木を独り占め

深見十萬

天帝の文たづさへて落雲雀

藤田紀潮

梅の香も利けず観るのみ八十路かな

宮下ひかる

木曾駒の群れて草食む雪間かな

森田光彦

陽光を返す水面や鳥帰る

山縣秀雄

梅一輪勇の墓を守りけり

吉岡誠山

蛇穴を出で好き者に尾行さる

石田きよし



北斗句会

五月定例会（メール句会） 兼題「雨」「葉」

五十音順 特選 石田きよし選

特選 若葉風夫婦地蔵の木曾路かな

大崎石州

人出なきコロナ禍の街柳絮とふ

太田黒幸風

風光る東西睨む鬼瓦

大森康政

松落葉アドレスひとつ削除せり

竹内雲泉

特選 みちのくはコロナ知らずの鯉幟

田中資凡

緑立つ磯の溜りの深き空

長池豆陽

人の世の騒ぎをよそに薦若葉

深見十万

特選 奥入瀬の阿修羅に若葉明りかな

藤田紀潮

葉桜の気持ち読みけり幹撫づる

宮下ひかる

天麩羅の柿若葉もて昼の酒

森田光彦

葉桜の光と影の交差かな

山縣秀雄

山頂の茶店で喫す新茶かな

吉岡誠山

無観客試合のやうな花吹雪

石田きよし



北斗句会

六月定例会（メール句会） 兼題「雨」「魚」

五十音順 特選 石田きよし選

身の上に鐘の音落つる儼の宿

大崎石州

棒グラフに一喜一憂夏に入る

太田黒幸風

特選 緑さす参道またぐ大鳥居

大森康政

特選 店子の声ひときは太き初鯉

竹内雲泉

久々の新茶届くと長電話

田中資凡

対向なき天城旧道風青し

長池豆陽

天も地も明るきままに緑雨かな

深見十万

特選 鎖樋つたふしづくや合歓の花

藤田紀潮

葉桜の艶に晴ればれ万歩かな

宮下ひかる

酒は灘肴は鰯の湯引きかな

森田光彦

新茶よと言はれて背筋伸ばしけり

山縣秀雄

初鯉の大漁に笑む富嶽かな

吉岡誠山

我が墓碑や夏うぐひすのしきりなる

石田きよし



北斗句会

七月定例会（メール句会） 兼題「花」「夕」

五十音順 尊は特選 石田きよし選

睡蓮や朝飯前の寺参り

大崎石州

螢来て闇に濃淡つけて去る

太田黒幸風

尊 夕立の予兆に終ふ畑作業

大森康政

父の日やひねもす介護手を抜けず

竹内雲泉

直さんの通りし道や立葵

田中資凡

荒梅雨や更けて山鳩啼き止まず

長池豆陽

夕顔の白さひときは闇の中

深見十万

尊 青田風筑波山は雲の湧くところ

藤田紀潮

揚げ花火コロナの治療ありがたう

宮下ひかる

奈良井宿旅人駆くる大夕立

森田光彦

尊 早朝の精気を貰ふ蓮の花

山縣秀雄

躓きて脛を蹴飛ばす初浴衣

吉岡誠山

夕立あとあたりを払ふ天守閣

石田きよし



北斗句会

八月定例会（五日 偕行社）

兼題 木 酒
五十音順 尊は特選 石田きよし選

海鞘の桶据ゑて車座大吟醸

大崎石州

そつと手を添えてやりたし女王花

太田黒幸風

A Iの決める麦酒の泡加減

大森康政

病床の妻の寝顔やひとよさけ

竹内雲泉

尊 棋聖戦棋譜をたどりて冷し酒

田中資凡

尊 青葉闇こぼるる日矢の万華鏡

長池豆陽

雨止まず新酒の酔に憂き晴らす

深見十万

尊 夏海へせりだす能登の千枚田

藤田紀潮

桔梗や八十路をとこも頑張るぞ

宮下ひかる

草田男忌昭和の匂ひ薄れゆく

森田光彦

コロナ禍の巣こもり癒す夏見舞

山縣秀雄

流水の鉄橋浚ふ梅雨出水

吉岡誠山

病窓や梅雨の高層ビルの黙

石田きよし

北斗句会

九月定例会（二日 偕行社）

兼題 実 踊

五十音順

特選 石田きよし選

枝豆を飛ばしつこして鳥を呼ぶ

大崎石州

兄が逆き順繰り上がる秋の蝶

太田黒幸風

三つ栗の孵化の如くに毬を割る

大森康政

空地ながむ中止されたる盆踊

竹内雲泉

盥 渴きたる蚯蚓の軀朝の黙

田中資凡

盥 樟の香や踊り浴衣のたたみ皺

長池豆陽

盥 嫋嫋と胡弓の余韻風の盆

深見十方

何もせて生きて八十路や酔芙蓉

藤田紀潮

盆踊り十年ふりにめぐり合ふ

宮下ひかる

コロナ禍や踊り中止の回覧板

森田光彦

盥 夕月夜長椅子ひとつ出されをり

山縣秀雄

伍勤兵長殿の小隊支那の秋

吉岡誠山

盆東風を入るる下りの湖西線

石田きよし

十月定例会（七日 メール句会）

兼題 「星」「蟬」

五十音順

特選 石田きよし選

かなかなの水面にこだま中禅寺

大崎石州

赤い羽根令和に生きる遺産かな

太田黒幸風

盥 ひぐらしの呼び込む夜の帳かな

大森康政

伏す前の妻丹精のコスモス咲く

竹内雲泉

山門を跨ぎ九月の雨を聞く

田中資凡

盥 切れ効かせ逸る調べのつくつくし

長池豆陽

盥 日輪を追ふて色づく酔芙蓉

深見十方

盥 小鳥来る大道芸のジャグリング

藤田紀潮

天の川故郷の空に安んずる

宮下ひかる

安曇野や流星を待つ夜もすがら

森田光彦

夕映えの中に溶け込む熟柿かな

山縣秀雄

ひぐらしや地獄のぞきに拝観料

吉岡誠山

いばむしり見得切るやうに貌まはす

石田きよし



北斗句会

十一月定例会（四日） メール句会

兼題 「虫」「栗」

五十音順

特選 石田きよし選

穂栗のつくねんとしてけふも雨

大崎石州

鈴虫のソプラノ響く峠の宿

太田黒幸風

一村の白昼締まる鉦叩

大森康政

夜の厨隅に陣どるちろかな

竹内雲泉

秋の夜や朝刊ひらき爪を切る

田中資凡

声明や紅葉降りしく平林寺

長池豆陽

満天に届けとばかり虫すだく

深見十方

薦もみじ地層の秘める太古かな

藤田紀潮

行く秋や思ひ思ひの羊雲

宮下ひかる

宿坊の闇を深めて鉦叩

森田光彦

常連の減りゆく集ひ秋しぐれ

山縣秀雄

趣味高じ飼育始める虫鳴けり

古岡誠山



夕映えを叩き釣り上ぐ紅葉鮒

石田きよし



北斗句会

十二月定例会（二日） メール句会

兼題 「葉」「焼」

五十音順

特選 石田きよし選

早朝散歩イヴモントンの枯葉

大崎石州

コロナ禍にエールを送る酉の市

太田黒幸風

コロナ禍や津々浦々の隙間風

大森康政

サクサクと落ち葉踏む音背が聞く

竹内雲泉

くつさめも咎める世なり車内の眼

田中資凡

夕と宵狭間を仕切る冬の星

長池豆陽

掃き溜し枯葉を散らかるつむじ風

深見十方

憂国の血潮めきたる冬夕焼

藤田紀潮

焼き芋の稚児と頬張る甘さかな

宮下ひかる

丸き背の喪服に長き木の葉髪

森田光彦

短日や沈む夕日を追ひかけて

山縣秀雄

光秀の御霊神社や虎落笛

古岡誠山



くるくると時計まはりに鳴る恋

石田きよし



北斗句会

一月定例会（十三日 メール句会）

兼題 「日」「賀」

五十音順 特選 石田きよし選

老いの身に喝をくれるぞ初日の出

大崎石州

元朝の晴れて多副の世の予感

太田黒幸風

達磨市願ひに見合ふサイズ買ふ

大森康政

歓声や中学校のラガーたち

竹内雲泉

何為さば妻喜ばむ三日過ぐ

田中資凡

賀客然正座に慣れぬ子らの貌

長池豆陽

秘めやかにミサの声する聖夜かな

深見十万

降りてこよ言の葉ひとつ冬銀河

藤田紀潮

しのび寄る老化を洗ふ初湯かな

宮下ひかる

日向ほこあれほれその苦笑ひ

森田光彦

冬麗やメタセコイヤの三角錐

山縣秀雄

去年今年新たな夢に老い忘れ

吉岡誠山



歌留多取る手先鬼滅の刃めく

石田きよし



北斗句会

二月定例会（三日 メール句会）

兼題 「寒」「魚」

五十音順 特選 石田きよし選

さあ喰へと居直りたるや寒の鯛

大崎石州

河豚刺しや白身に透ける皿模様

太田黒幸風

日は西に寒林すでに燃え始む

大森康政

豆撒きや心のうちもそとへ投げ

竹内雲泉

自転車に積む子走る子母の春

田中資凡

皮をむく泥ねぎ楚々と腸たけて

長池豆陽

節分や新ウィルス鬼退治せむ

深見十万

コロナ世の闇に一擲鬼は外

藤田紀潮

けふもまた歩みつつ観む残り鴨

宮下ひかる

父の忌にひとり経読む寒さかな

森田光彦

風花の土手をまつすぐ子ら走る

山縣秀雄

立春や古傷の膝曲げ伸ばし

吉岡誠山



白鳥の矜時に犬の後退り

石田きよし

北斗句会

三月定例会（三日 メール句会）

兼題 「餅」「芽」

五十音順

特選 石田きよし選

静かなる人ばかりなり花の山

大崎石州

白波の先に椿の伊豆七島

太田黒幸風

祭壇の友の遺影や鳥雲に

大森康政

靴音の暖かさ増す歩道橋

竹内雲泉

こみ出して暫く仰ぐ月おぼろ

田中資凡

春耕や日記押しのけ農日記

長池豆陽

真間川の狭き流れや残り鴨

深見十萬

弥陀仏に聞けよ聴けよと初音かな

藤田紀潮

草餅を喰らひてハイク軽やかに

宮下ひかる

炊き立ての御飯の湯気や木の芽和へ

森田光彦

春きさす我を追ひ抜く女学生

山縣秀雄

桜餅認知症まだ早すぎる

吉岡誠山

殺生の目刺しの竹をそつと抜く

石田きよし

四月定例会（七日 定例会句会 偕行社）

兼題 「雛」「木」

五十音順

特選 石田きよし選

春風に尻を吹かれて上野山

大崎石州

木蓮の白に勝れる白はなし

太田黒幸風

終活や雛に別れを言ひだせず

大森康政

病む妻の花散つたかと尋ねけり

竹内雲泉

根分けする日当たりながら二人かな

田中資凡

不耕起てふ探る未来や芋植ゑり

長池豆陽

出来ぬこと又一つ増ゆ落椿

深見十萬

春風や墓標に深く虚子の文字

藤田紀潮

田舎道囁き交はす黄水仙

宮下ひかる

クレヨン画の雛人形にマスクかな

森田光彦

木の芽吹く病後の我に旅ごころ

山縣秀雄

聖火来る隣りの亀の鳴くを待つ

吉岡誠山

一本に長幼序あり紫木蓮

石田きよし



五月定例会（五日 メール句会）

五十音順

兼題 「風」「虫」
特選 石田きよし選

傘さして超える箱根や五月雨

大崎石州

川風や揃ひて泳ぐ恋のぼり

太田黒幸風

牛蛙ホルンまがひのベース打ち

大森康正

雨しづく丈余に伸びし今年竹

竹内雲泉

新築の若き家族や鯉のぼり

田中資凡

春愁や検査結果は連休後

長池豆陽

音もなく蚊柱立ちぬ夕間暮れ

深見十万

八十の身の八十八夜の深呼吸

藤田紀潮

鴉の子鳴く古民家や我が家なり

宮下ひかる

銀輪の少女の列や風光る

森田光彦

蛤や我がもの顔に飛ばす潮

山縣秀雄

コロナ禍や凜と咲きたる君子蘭

吉岡誠山



幾たびも仕上り眺め剪定す

石田きよし



六月定例会（二日 通信句会）

五十音順

兼題 「青」「幟」
特選 石田きよし選

石仏の鼻にのつかる蟬の殻

大崎石州

緑陰に円座で憩う園児たち

太田黒幸風

雨蛙太つ腹見せガラス窓

大森康正

歳時記を手にして外へ夏の雲

竹内雲泉

きらりきらり実梅のこぼす雨雫

田中資凡

妻臥して悟る卵の花腐しかな

長池豆陽

青鷺のみじろぎもせぬ汀かな

深見十万

大拙の墓碑に動かぬ青蛙

藤田紀潮

禅林のどこもく像や花菖蒲

宮下ひかる

青簾揺るる旧家の足助路

森田光彦

緑陰や陣取りしたる石の椅子

山縣秀雄

走り梅雨懇意な歯科医転居せり

吉岡誠山



悪事なすやうに傘寿のサングラス

石田きよし



七月定例会（七日 通信句会）

兼題 「日」「白」

五十音順 特は特選 石田きよし選

木曾の旅宿のもてなす蚊遣香

大崎石州

背伸びして彩競ふ花菖蒲

太田黒幸風

特 両国や四股名浴衣とすれ違ひ

大森康正

特 今朝はまたひとつ上咲く立葵

竹内雲泉

羅に女さかりの風含み

田中資凡

ちまちまとしやぶるするめや半夏雨

長池豆陽

木も草も時を得たるや夏至の雨

深見十万

特 半夏雨机上にコロナ予診票

藤田紀潮

白鷺のカメラ向くるや飛び去りし

宮下ひかる

白南風や朝日に映ゆる伊良湖岬

森田光彦

行くほどに深まる闇に舞ふほたる

山縣秀雄

誕生会颯爽と来る白日傘

吉岡誠山



教へたる辻を曲りし日傘かな

石田きよし



八月定例会（四日 通信句会）

兼題 「水」「子」

五十音順 特は特選 石田きよし選

特 ぐい呑みの底に吉の字冷し酒

大崎石州

未練ありやしがみつきたる蟬の殻

太田黒幸風

秩父路やカフェの天然水

大森康正

暑き日や水でもてなす不意の客

竹内雲泉

芝刈つて刈つて炎天仰ぎ見る

田中資凡

喫水の浅き船往く晩夏光

長池豆陽

きつかけは些末なことよ水中花

藤田紀潮

逗子の海紺の水着を長めにす

宮下ひかる

特 饒舌の女将の運ぶ零余子飯

森田光彦

特 籐椅子や八十路の迎る着地点

山縣秀雄

打ち水や縁台将棋はじめけり

吉岡誠山



紅はちす葉並みの上の孤高かな

石田きよし



九月定例会（二日 通信句会）

兼題 「柿」「虫」

五十音順 特選 石田きよし選

月々の聲聴く句会秋扇

大崎石州

踏み込めばすつと消え入る虫時雨

太田黒幸風

虫探す少年の目の輝けり

大森康正

肩へ来て別れの沙汰や秋の蟬

竹内雲泉

青空や青柿しかと青々と

田中資凡

コロナ禍の野辺の送りや法師蟬

長池豆陽

螻蛄鳴くやひとり夕餉のサーロイン

藤田紀潮

齧り付き味はひ尽くす里の柿

宮下ひかる

柿食ふやころろ笑ふ妻のゐて

森田光彦

切り分けし白桃光る瑠璃の皿

山縣秀雄

落蟬に手指の触るや飛び跳ねて

吉岡誠山



向日葵の正眼のまま枯れにけり

石田きよし



十月定例会（十三日）

兼題 「瓜」「魚」

五十音順 特選 石田きよし選

落鮎やカヤック下る熊野川

大崎石州

名月や障子に映ゆる松の影

太田黒幸風

語り合ふ今宵の月と天主閣

大森康正

そよそよと萩の揺れ合ふ堤かな

竹内雲泉

鯛雲コロナに失せる時の影

田中資凡

泥落とす鯨先照らす望の月

長池豆陽

七曜に疎くなりけり後の月

藤田紀潮

一匹も釣れぬ帰りや鯛雲

宮下ひかる

柚の径照らすがごとく烏瓜

森田光彦

階段を一步一步や秋の風

山縣秀雄

駿河より見上ぐる富士や鳥渡る

吉岡誠山



蔓たぐりつつ自然薯の齡読む

石田きよし



北斗句会

十一月定例会（十日 偕行社）

兼題 「酒」「紅」

五十音順 特選 石田きよし選

角巻に首引き入るる老婆かな

大崎石州

秩父路や寺や神社や紅葉狩

大森康正

十年の病寛解新酒買ふ

竹内雲泉

畦道に稚児放尿の小春かな

田中資凡

亡きひとの消せぬメールや散紅葉

長池豆陽

小春日の鉤かがりの妻の指

藤田紀潮

窓の下気を持たせるな酔芙蓉

宮下ひかる

道真を偲ぶ菊酒夜の更くる

森田光彦

碑の語る悲劇や夕紅葉

山縣秀雄

妻ときて二年越しなる一夜酒

吉岡誠山



着流しの西郷像や秋の風

石田きよし



北斗句会

十一月定例会（三日）

兼題 「木」「日」

五十音順 特選 石田きよし選

おれん家を静かによぎる除夜の鐘

大崎石州

皴の手の諸々語る柚子湯かな

大森康正

足軽き通院帰り冬うらら

竹内雲泉

五千歩のいつしか崩れ寒き朝

田中資凡

畑の隅焼いも食みつ寂聴論

長池豆陽

特攻の墓碑に影おく冬紅葉

藤田紀潮

富士山と大山はるか木の葉散る

宮下ひかる

日を浴ぶる土に列なす芽麦かな

森田光彦

小春日やラジオ片手に座る土手

山縣秀雄



小春日や遊びころのちぎれ雲

石田きよし

北斗句会

北斗句会自選三句(令和三年)

(五十音順)

(二年七月〜三年六月の間の三十六句から)

傘寿

石田きよし

悪事なすやうに傘寿のサングラス
歌留多取る手先鬼滅の刃めく
青鷺の三步やまたも動かさる

しはぶき

大崎石州

しはぶき一つ妻二つ変はりなし
早朝散歩イヴモンタンの枯葉
往く吾の道草となる花の山

エール

太田黒幸風

兄が逝き順繰り上がる秋の蟬
コロナ禍にエールを送る酉の市
木蓮の白に勝れる白はなし

赤い頬つべ

大森康正

柔らかな赤い頬つべに春の風
ひぐらしの呼び込む夜の帳かな
コロナ禍や津々浦々の隙間風



北斗句会

ひとよさけ 竹内雲泉

病床の妻の寝顔やひとよさけ
鷹鳩と化す青空や腕枕
雨しづく丈余に伸びし今年竹

棋譜

田中資凡

棋聖戦の棋譜をたどりて冷し酒
自転車に積む子走る子母の春
渴きたる蚯蚓の骸朝の黙

声明

長池豆腐

声明や紅葉降りしく平林寺
賀客然正座に慣れぬ子らの貌
皮をむく泥ねぎ楚々と臍たけり

満天

深見十萬

満天に届けとばかり虫すたく
出来ぬこと又一つ増ゆ落椿
江戸川の波逆立てて春疾風

憂国

藤田紀潮

神宮の杜の世紀や揚雲雀
大拙の墓碑に動かぬ青蛙
憂国の血潮めきたる冬夕焼



北斗句会

ハイキング 宮下ひかる

国宝の小便小僧冬着なし
夕焼の歌聴きながらハイキング
三溪の愛でつ残せし臥竜梅

旅人 森田光彦

奈良井宿旅人駆くる大夕立
宿坊の闇を深めて鉦叩
父の忌にひとり経読む寒さかな

紅蓮 山縣秀雄

早朝の精気貰ふや紅蓮
夕月夜長椅子ひとつ出されをり
冬麗やメタセコイヤの三角錐

日輪 吉岡誠山

日輪を追うて色づく酔芙蓉
光秀の御霊神社や虎落笛
認知症まだ早すぎる桜餅



令和 4 年



北斗句会

令和四年一月定例会（五日）

兼題 「初」「餅」

五十音順

特選

石田きよし選

ひいふうみい天神様の梅早し

大崎石州

餅をつく相の手婆の腕まくり

大森康正

寿ぎのはがきにさえも雪の愚痴

竹内雲泉

二人ただ片言かはす除夜の鐘

田中資凡

土に生き土に生かさる初音

長池豆陽

モノクロの記憶の底に越後獅子

藤田紀潮

餅喰へば九人家族の彼の田舎

宮下ひかる

老妻とあと幾年や雑煮餅

森田光彦

寒波来て入日ひときは輝けり

山縣秀雄

餅つきや老人クラブ青年部

吉岡誠山



もの言はず膨らむ餅や妻の留守

石田きよし



北斗句会

令和四年二月定例会（二日）

兼題 「雪」「帽」

五十音順

特選

石田きよし選

雪まとひほつこり貌の地藏尊

大崎石州

髪形に成人式の主張かな

大森康正

ふんはりと芽につれなくも春の雪

竹内雲泉

雪降るや遊行の道へ又一步

田中資凡

一身に余光引き寄す雪の富士

長池豆陽

立春の朝日をあぶる鬼の面

藤田紀潮

野球帽長寿の基梅探ぐる

宮下ひかる

限りなく降る雪肩に伍長像

森田光彦

ひと筋の夕陽映ゆるや冬の池

山縣秀雄

蒼天に締め寒柝響きけり

吉岡誠山



ひと列車遅らせ湖の鳩とゐる

石田きよし



北斗句会

令和四年三月定例会（二日） 兼題 「風」「火」

五十音順 轡は特選 石田きよし選

一気飲みこの味はひそ春の水

大崎石州

轡 風光る砕くる磯の波頭

大森康正

病床にお粥の湯気や春霞

竹内雲泉

轡 妻に客春の香襟に秘そめくる

田中資凡

小走りの小さき会釈や寒返る

長池豆陽

轡 風光る老舗そば屋の水車小屋

藤田紀潮

貴重なる蛤は焼け煮るは馬鹿

宮下ひかる

春炬燵仕舞ふて大の字となりぬ

森田光彦

日溜りの葉艶まふしき椿かな

山縣秀雄

塗りたくる膝痛葉春寒し

吉岡誠山

 落椿なほ地に咲ける構へかな

石田きよし



北斗句会

令和四年四月定例会（六日） 兼題 「山」「鳥」

五十音順 轡は特選 石田きよし選

轡 大社正中ずんずんと若緑

大崎石州

蘇る戦下の別れ鳥雲に

大森康正

轡 妻の髪手櫛で梳くや春の宵

竹内雲泉

山笑ふ新調したる杖と靴

田中資凡

轡 白波の逸る黒潮鳥雲に

長池豆陽

柴又は花の昼なり啖呵売

藤田紀潮

四周には菜の花飾る吾妻山

宮下ひかる

ゴルファーのミニスカートや山笑ふ

森田光彦

たんぽぽや建売の庭一面に

山縣秀雄

富士を背に囁り競ふ揚雲雀

吉岡誠山

 耕して逝くべきときを延ばしけり

石田きよし



北斗句会

令和四年五月定例会（十一日）

兼題 「花」「日」

五十音順

特選 石田きよし選

皆の血を吸ひし藪蚊のこけてをり

大崎石州

武者人形吾と齡を重ねけり

大森康正

鷹揚に天に向ひて花水木

竹内雲泉

生垣の葉先一線夏は来ぬ

田中資凡

みどりこの握る力や柿若葉

長池豆陽

隧道をぬけて天城の新樹光

藤田紀潮

ハイビスカス世界の旅を思い出す

宮下ひかる

たたなづく小粉団の花風を呼ぶ

森田光彦

尾緒まで風含ませて鯉幟

山縣秀雄



無骨なる男気放つ棕櫚の花

石田きよし



北斗句会

令和四年六月定例会（二日）

兼題 「青」「雨」

五十音順

特選 石田きよし選

砂かぶり玄人衆の暑氣払ひ

大崎石州

花は葉にひいき力士の勝ち名乗り

大森康正

鳴きさうな顔してなかなぬ雨蛙

竹内雲泉

緑蔭に人の輪のあり詩のあり

田中資凡

青葉闇抜けてはるかに伊豆の海

長池豆陽

花合歓や双子のねむる乳母車

藤田紀潮

八十路爺青蘆原をけふも往く

宮下ひかる

驟雨去る黙せしままの二人かな

森田光彦

コロナ禍やウキウキ感の無き五月

吉岡誠山



錦鯉跳ねて一気に景奪ふ

石田きよし



北斗句会

令和四年七月定例会（六日）

兼題 「緑」「雨」

五十音順

特選 石田きよし選

路地端ではやおいほれし七変化

大崎石州

緑さす水面の浮子に当りかな

大森康正

夏蒲団ふはりと妻の胸にかけ

竹内雲泉

雹降るや安住の街豹変す

田中資凡

挙手競ふ園児のやうな花南瓜

長池豆陽

万緑や鞘に鎮もる光堂

藤田紀潮

けふも来て緑のさそふ足軽く

宮下ひかる

緑陰や貴船神社の雨あがる

森田光彦



木道のくの字くの字や花菖蒲

石田きよし



北斗句会

令和四年八月定例会（三日）

兼題 「暑」「虫」

五十音順

特選 石田きよし選

森の蟬いかつき聲にほそき声

大崎石州

窓枠の景に一瞬あげは蝶

大森康正

いつときは介護疲れの麦茶かな

竹内雲泉

墓地裏の素知らぬふりの百日紅

田中資凡

禁色の深紅はかくやトマト熟る

長池豆陽

蚊遣香渦のまなかにある昭和

藤田紀潮

虹渉り彼の訪れし国偲ぶ

宮下ひかる

起重機の影動かさる炎暑かな

森田光彦

夏燕池かすめれば雨近し

吉岡誠山



一個つつ声かけて採る胡瓜かな

石田きよし



北斗句会

令和四年九月例会（七日） 兼題 「一」「来」

五十音順 特選 石田きよし選

特 参道に一目一目の紅葉かな 大崎石州

特 友情に押されて一句竹の秋 太田黒幸風

黄落期自分史辿る八十路かな 大森康正

本閉ぢし机の上の残暑かな 竹内雲泉

特 落蟬を一瞥しては過ぎにけり 田中資凡

楔打つ鎌の響きや空高し 長池豆陽

はぢらひのいろをひそめて白芙蓉 藤田紀潮

かなかなや元氣を出せと万回も 宮下ひかる

始発待つ一番ホーム霧の中 森田光彦

西瓜食う運転免許証返す 吉岡誠山



蔑切やひと言多き妻とゐて 石田きよし



北斗句会

令和四年十月定例会（五日） 兼題 「友」「発」

五十音順 特選 石田きよし選

特 タクマラカン沙漠に独り月の友 大崎石州

塩結びほのかに甘き今年米 太田黒幸風

特 ファンファーレ秋気震はす発馬かな 大森康正

ひさびさに友から便り流れ星 竹内雲泉

特 理事会の懸案決議涼新た 田中資凡

銀漢や父の徹せしリハビリ行 長池豆陽

歳時記のここよ此処よと蚯蚓鳴く 藤田紀潮

和と洋の調和の館ちろ虫 宮下ひかる

特 島発の最終便や銀河濃し 森田光彦



生きたとは戦いやなあ考の処暑 石田きよし



北斗句会

令和四年十一月定例会（二日） 兼題 「食」「別」

五十音順 轡は特選 石田きよし選

轡 チベットや鳥葬あとのうそ寒し

大崎石州

轡 神の留守少しけちりしお賽銭

太田黒幸風

列島に別れを告ぐる鷹柱

大森康正

八百正のおやじ大声秋渴き

竹内雲泉

轡 体育の日わが足腰の声を聴く

田中資凡

術後初啜る重湯や秋うらら

長池豆陽

轡 露むぐら北条果てし寺の跡

藤田紀潮

こほろぎや堤防歩き遅足に

宮下ひかる

今年酒杯を重ねる別離かな

森田光彦



生くるとは会ひと別れの柚味噌かな 石田きよし



北斗句会

令和四年十二月定例会（七日） 兼題 「直」「音」

五十音順 轡は特選 石田きよし選

年ひとつ老いて聴き入る除夜の鐘

大崎石州

四つ割りの白菜ならぶ物価高

太田黒幸風

音かろく転ぶ落葉やビルの谷

大森康正

障子貼り気を取直し為遂げけり

竹内雲泉

枯枝をさつくり捌く鋸の音

田中資凡

轡 退院や潜る蒲団の日の匂ひ

長池豆陽

轡 コロナ世に生きて目深に冬帽子

藤田紀潮

大根を直に嘔りて野趣びたり

宮下ひかる

轡 真つ直ぐに家路を二人冬の暮

森田光彦



仕舞湯の妻に足したる柚子ふたつ 石田きよし

北斗句会

北斗句会 自薦三句（令和四年）

（五十音順）

くの字 石田きよし

もの言はず膨らむ餅や妻の留守
ひと列車遅らせ湖の鳩とゐる
木道のくの字くの字や花菖蒲

若 緑 大崎石州

大社正中づんづんと若緑
ぐい呑みの底に吉の字冷し酒
月々の聲聴く句会秋扇

風光る 大森康正

風光る砕くる磯の波頭
武者人形吾と齢を重ねけり
木枯や頼り頼られ共白髪

雪の朝 竹内雲泉

無の世界いよいよ近し秋詰
妻の肩そつと除きぬ木の葉髪
道をうつ鉄鎖の音や雪の朝



北斗句会

遊行の道 田中資凡

雪降るや遊行の道へ又一歩
若返る揃ひのセーター赤と黒
薔薇の香やさしだす妻の唇紅し

花南 瓜 長池豆陽

亡きひとの消せぬメールや散紅葉
みどりごの握る力や柿若葉
挙手競ふ園児のやうな花南瓜

向日葵 藤田紀潮

特攻の墓碑に影おく冬紅葉
向日葵や戦なき日のウクライナ
硫黄島に果てし御霊や銀河濃し

八十路健康 宮下ひかる

初伊勢や八十路健康感謝せむ
柿食へば九人家族の彼の田舎
赤い靴履く少女像薔薇香る



北斗句会

雪

森田光彦

柿食ふやころころ笑うふ妻のゐて
杣の径照らしてをりぬ鳥瓜
限りなく降る雪肩に伍長像

寒

桥

吉岡誠山

富士を背に轉り競ふ揚雲雀
蒼天に締め寒桥響きけり
駿河より見上げる富士や鳥渡る





北斗句会

令和五年一月定例会（十一日）

五十首順

特選

石田きよし選

朝日さすベースキャンブの霜の花

大崎石州

乳呑児の微笑む寝顔福寿草

太田黒幸風

達磨市活気高まる手打ちかな

大森康正

初春や臥して七年妻の詩

竹内雲泉

躍の字のおどる卯年の年賀状

田中資凡

生かされて新生誓ふ老いの春

長池豆陽

一輪の風にさらはる冬桜

藤田紀潮

沢庵や家族と漬けし里の樽

宮下ひかる

子や孫の膳を並ぶる妻の春

森田光彦



庭に来る鳥に御慶を申し上ぐ

石田きよし



北斗句会

令和五年二月定例会（一日）

五十首順

特選

石田きよし選

柏手の凍てし御宮に響きけり

大崎石州

厄払友と一杯氣力湧く

太田黒幸風

寒稽古眉間に刺さる気合かな

大森康正

凍星や幾世変はるも君と添ふ

竹内雲泉

大寒や漢字浮ばぬ鮎のねた

田中資凡

天地替へ生氣吹き込む冬の畑

長池豆陽

雲梯に子の影ひとつ冬日和

藤田紀潮

晴ればれと七宮参りあたたかし

宮下ひかる

大陸の凍る気団や雲早し

森田光彦



どちら欠くも残るは独り祝箸

石田きよし



北斗句会

令和五年三月定例会（一日）

五十首順 轡は特選 石田きよし選

正義とは甘美なりしや春の虹

大崎石州

闘争心失せて眩しき猫の恋

太田黒幸風

日々に増す春の小川の音の色

大森康正

轡 永き日や目玉ぎよろぎよろ探しもの

川崎きこう

病床の妻の鼻歌日の永し

竹内雲泉

轡 春なれや足の裏なる歩き神

田中資凡

片足を出してうたた寝春炬燵

長池豆陽

轡 木目込みの疵のぬくもり雛飾る

藤田紀潮

黄水仙道案内になりけ

宮下ひかる

轡 義理チョコや爺にもバレンタインデー

森田光彦



罪犯す思ひして踏む薄氷

石田きよし



北斗句会

令和五年四月定例会（五日）

五十首順 轡は特選 石田きよし選

街灯の路地奥明かし春の雨

大崎石州

轡 花に酔ひ話に酔ひしクラス会

太田黒幸風

轡 微風に会釈を返す犬ふぐり

大森康正

轡 春の宵ひとり静かに緑酒かな

川崎きこう

楚々とした白き傘あり花の下

竹内雲泉

松林の奥に一本白木蓮

田中資凡

黒塚の能の余韻や花の闇

長池豆陽

轡 朧なる沖に空母のらしき影

藤田紀潮

川沿ひを長閑に歩くきのふけふ

宮下ひかる



余生なほ落花に揺るる恋こころ

石田きよし



北斗句会

令和五年五月定例会（九日）

五十音順 轡は特選 石田きよし選

轡 チベットや五体投地の夏来る 大崎石州

子供の日食すお子さまランチかな 太田黒幸風

縄張りを歌つて守る雲雀かな 大森康正

轡 行く春や友の訃報に驚愕す 川崎きこう

短夜や妻の寝顔の微笑めり 竹内雲泉

菜の花や笑み満天の明るさよ 田中資凡

轡 伐り過ぎし垣のあたりや暮れかぬる 長池豆陽

村里の一戸に高く鯉幟 藤田紀潮



あの笑顔逝きし句友の春惜しむ 石田きよし



北斗句会

令和五年六月定例会（七日）

五十音順 轡は特選 石田きよし選

轡 新疆のオアシス襲ふ熱き砂 大崎石州

地上の夢追ひて日干しのみみずかな 太田黒幸風

株ごとに華やぎ放つ牡丹かな 大森康正

青田道水面に映ゆる木立かな 川崎きこう

花桐や余命の中に生きてをり 竹内雲泉

退院の二人の朝や五月晴 田中資凡

緑さす天城の谷の朝の風呂 長池豆陽

轡 万緑や古刹の奥の能舞台 藤田紀潮



幼子を立たせるやうに茄子を植う 石田きよし



北斗句会

令和五年七月定例会（五日）

五十音順 特選 石田きよし選

サンガラス小心者を大胆に 太田黒幸風

雲の峰ぐんぐん延びる八十路かな 大森康正

けふもまた片陰求め路地に入る 川崎きこう

雨もよひ日ごと色増す四葩かな 竹内雲泉

特選 廊跡らし路地裏の五月闇 田中資凡

特選 夕鯨やなめろう作るたたき音 長池豆陽

特選 今一度小さく手をふる白日傘 藤田紀潮



沖縄忌地球は今も戦時中

石田きよし



北斗句会

令和五年八月定例会（二日）

五十音順 特選 石田きよし選

タクマラカン熱砂の果てに入日かな 大崎石州

朝夕の風に初秋の気配かな 太田黒幸風

滲むこと闇を薄むる祭舟 大森康正

犬吠の海霧の消え去り鳴かな 川崎きこう

特選 妻の手に匙握らせて夏水 竹内雲泉

特選 百日紅の一年に逝きし魂 田中資凡

兄の手の強き記憶や夜店の灯 長池豆陽

特選 夏料理港横浜十五階 藤田紀潮



ちよつとした勇気をこの黒日傘 石田きよし



北斗句会

令和五年九月定例会(十三日)

五十音順 轡は特選 石田きよし選

轡 哈密瓜はシルクロードの馳走かな 大崎石州

語り合ひし友逝き逝きて彼岸花 太田黒幸風

轡 晩酌や地産大豆の新豆腐 大森康正

秋の灯や仏語学びし遠き日々 川崎きこう

帰省子の大の字占むる六畳間 竹内雲泉

病院の領収書繰る夜長かな 田中資凡

轡 逃避行を語りし友よ敗戦忌 長池豆陽

音もせて決まる着地や桐一葉 藤田紀潮



妻を呼び三五の月をふたり占め 石田きよし



北斗句会

令和五年十月定例会(四日)

五十音順 轡は特選 石田きよし選

やがて逝く気配は見えず秋の蟬 大崎石州

上品に食ふは難し衣被 太田黒幸風

虫の声今宵の宿を包み进行 大森康正

轡 秋雲や友を誘ひて開碁の会 川崎きこう

菊の香や友の音沙汰無くなりぬ 竹内雲泉

轡 秋の虹妻の声あり生きめやも 田中資凡

轡 亡き妹の褒むる声する秋茄子 長池豆陽

轡 白秋碑十重に二十重に赤とんぼ 藤田紀潮



突つ掛けを履き夕映えの粹芙蓉 石田きよし



北斗句会

令和五年十一月定例会(一日)

五十首順 轡は特選 石田きよし選

ひいふうみ家の明かりや秋の暮

大崎石州

轡 クラス会これが最後か秋惜しむ

太田黒幸風

友逝きて枯葉の道を踏みならす

大森康正

秋の夜や昴となりし新司かな

川崎きこう

轡 病妻の敷布新たに冬用意

竹内雲泉

立冬や息整へて一万歩

田中資凡

残照の秩父連山冬めけり

長池豆陽

轡 合掌の軒に二重の柿すだれ

藤田紀潮



昂りて秋の蟬語の切羽かな

石田きよし



北斗句会

令和五年十二月定例会(六日)

五十首順 轡は特選 石田きよし選

胸に手を置きて目覚むる寒の雨

大崎石州

轡 守護神の一投のミス枯芭蕉

太田黒幸風

轡 おでん味噌守り続ける母の味

大森康正

風に舞ふ落葉のダンスランララ

川崎きこう

諸粥の味引き締めよ塩ひとつ

竹内雲泉

天の気を腹いっばいに日向ぼこ

田中資凡

轡 墓所守る老楠の時雨傘

長池豆陽

然はされどちつと掌を見る大晦日

藤田紀潮



孫むすめと五手詰めを解く小春かな

石田きよし

令和5年 自薦三句

北斗句会 自薦三句 (令和五年)

〈五十音順〉

御 慶 石田 きよし

仕舞ひ風呂の妻に足したる柚子ふたつ
庭に来る鳥に御慶を申し上ぐ
幼子を立たせるやうに茄子を植ふ

チベツト 大崎 石州

チベツトや鳥葬あとのうそ寒き
崑崙の無分別なる秋ひでり
タクラマカン沙漠に独り月の友

クラス会 太田 黒 幸風

花に酔ひ話に酔ひしクラス会
四つ割の白菜並ぶ物価高
水漬をすする老将背は直に



1

北斗句会 自薦三句 (令和五年)

〈五十音順〉

微 風 大森 康正

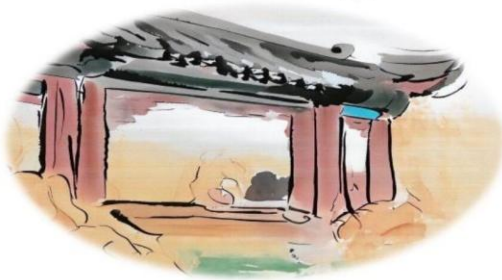
微風に会釈を返す犬ふぐり
鶺鴒や古代の影を炙り出し
音かろく転ぶ落葉やビルの谷

訃 報 川崎 きごう

春の宵ひとり静かに緑酒かな
行く春や友の訃報に驚愕す
柿若葉妻とふたりの食に添へ

花 桐 竹内 雲泉

今朝の秋食器を洗ふ水にふと
戦乱の世の行く末や初日の出
花桐や余命の中に生きてをり



2

北斗句会 自薦三句 (令和五年)

〈五十音順〉

歩き神 田中 資凡

理事会の懸案決議涼あらた
体育の日わが足腰の声を聴く
春なれや足の裏なる歩き神

蛇 莓 長池 豆陽

戦争の遺構の路や蛇莓
楔打つ鋏の響きや空高し
退院や潜る蒲団の日の匂ひ

光 堂 藤田 紀潮

球春やVの雄叫びマイアミに
若葉風古刹の奥の能楽堂
万緑や鞘に鎮もる光堂



3

北斗句会 自薦三句 (令和五年)

〈五十音順〉

野 趣 宮下 ひかる

大根を直に嚙りて野趣ずばり
振向かば何やらゆかし石路の花
黄水仙道案内になりにけり

二 人 森田 光彦

起重機の影動かざる炎暑かな
真つ直ぐに家路を二人冬の暮
子や孫の膳を並ぶる妻の春



4

令和6年



北斗句会

令和六年一月定例会（十日）

五十音順 轡は特選 石田きよし選

中庭でなにやらゆかし羽子の音

大崎石州

轡 除夜の鐘この一年を真つ白に

太田黒幸風

轡 碧空へ響く手締めや達磨市

大森康正

乾杯の白ワインかな朝の春

川崎きこう

逝く人や歳月待たず年明くる

竹内雲泉

詩心を大事に生きむ初句会

田中資凡

餅搗きやこね取る母の手の紅き

長池豆陽

轡 浜千鳥橋のたもとの白秋碑

藤田紀潮



羽衣の木の枝枯るる余呉の湖

石田きよし



北斗句会

令和六年二月定例会（七日）

五十音順 轡は特選 石田きよし選

轡 ビル谷間ふんばり貌の春の月

大崎石州

仮の家の槌音高き能登の春

太田黒幸風

盆梅や蕾の二三笑み始む

大森康正

轡 春待つや句会の友のまたも逝く

川崎きこう

病床の寝顔に笑窪春近し

竹内雲泉

色めきて梅の蕾の日一日

田中資凡

打ち込みの強き友の書淑氣満つ

長池豆陽

轡 鶏鳴の声もあかるき水仙郷

藤田紀潮



歩くかも知れぬ大根引つこ抜く

石田きよし



北斗会

令和六年三月定例会(六日)

五十音順 豊は特選 石田きよし選

天神の木々の目覚めや梅の花

大崎石州

春愁や胸中のひと夢に立つ

太田黒幸風

豊 園庭や遊具を濡らす春の雪

大森康正

春の日や役満の神つひに笑む

川崎きこう

あたたかや猫背して切る足の爪

竹内雲泉

球春の音沖繩の野を染むる

田中資凡

豊 古雛添ふる遺影に笑まひをり

長池豆陽

豊 交番の留守居のごとく紙雛

藤田紀潮



野遊びの子ら風となり好き勝手

石田きよし



北斗会

令和六年四月定例会(三日)

五十音順 豊は特選 石田きよし選

樹々おのおの背も腹もなく木の芽張る

大崎石州

豊 セピア色のはにかむ二人花吹雪

太田黒幸風

春寒し役員決める阿弥陀籤

大森康正

春場所や優勝攫ふ新入幕

川崎きこう

春陰や新聞今朝もいくさ記事

竹内雲泉

豊 茶飯事と朝寝の妻の背をさする

田中資凡

豊 畑打ちや転ぶ幼虫肌白き

長池豆陽

初桜日露の役の兵の墓碑

藤田紀潮



役終ふやまたも別箱夫婦雛

石田きよし



北斗句会

第二五二回（令和六年五月）定例会（八日）

五十首順 轡は特選 石田きよし選

新緑のプロムナードや人染まる

大崎石州

轡 天然の匠の極み柿若葉

太田黒幸風

鬘を断つ力士の涙花は葉に

大森康正

花散るや竹馬の友は天国へ

川崎きこう

轡 あところは天下国家を昭和の日

竹内雲泉

柏餅食ふたび故人そこにあり

田中資凡

轡 子子や水中シヨウのサンバめく

長池豆陽

日本丸総帆展帆五月晴

藤田紀潮



八十路にも母恋ふこころ蜆汁

石田きよし



第二五三回北斗句会（令和六年六月五日）

五十首順 轡は特選 石田きよし選

精鋭の基本は姿勢五月富士

太田黒幸風

百虫の明滅の間に個性かな

大森康正

雨上がり白き雲間に薄暑光

川崎きこう

轡 大ぶりの鯡を手に入れ姿焼き

竹内雲泉

十葉や一葉をもて認知症

田中資凡

轡 両腰に蚊取線香鬨志満つ

長池豆陽

轡 梅雨晴れ間アガパンサスの競う妍

藤田紀潮



青あをと少年めける今年竹

石田きよし



第二五四回北斗会（令和六年七月三日）

五十音順 特選 石田きよし選

中禅寺湖面に叩くや蟬の声

大崎石州

特選 相性と言へば雨水と四葩かな

太田黒幸風

故郷やあの日の空に遠花火

大森康正

夏の日の声なき声や都知事選

川崎きこう

特選 読みかけてこきざり叩く新聞紙

竹内雲泉

耳底に神の誘ふ祭笛

田中資凡

終戦日間近に逝きし兄の笑み

長池豆陽

特選 をちこちに大漁旗立つ夏遍路

藤田紀潮



夏蝶や余生に要らぬ敵味方

石田きよし



第二五五回北斗会（令和六年八月七日）

五十音順 特選 石田きよし選

特選 薄ころもまとひて粹な金魚かな

大崎石州

青空に日の丸眩しパリの夏

太田黒幸風

帰路の雨予知してくれし雨蛙

大森康正

腰痛やぜひ欲しかりき夏休み

川崎きこう

特選 向かうから少しの敵意片かけり

竹内雲泉

特選 炎天や虚空睥睨摩崖仏

田中資凡

知と行の間に揺るぐ西瓜採り

長池豆陽

浦上の鐘鳴りわたる原爆忌

藤田紀潮



メダルより研がれし汗の光りけり

石田きよし



第二五六回北斗句会(令和六年九月四日)

五十音順 轡は特選 石田きよし選

何をする家とも見えず藪からし

大崎石州

轡 長き夜や推敲重ね一句詠む

太田黒幸風

秋冷や時に感ずる認知症

大森康正

秋立つやガザの空にも平和をと

川崎きこう

八百正に声掛けられて秋茄子

竹内雲泉

残照を身体にとどめ秋に入る

田中資凡

轡 身のこなし鬼つつこめく赤とんぼ

長池豆陽

轡 雲梯の次の手の出ぬ夏の果て

藤田紀潮



あほでよし阿呆がよろし盆踊

石田きよし



第二五七回北斗句会(令和六年十月二日)

五十音順 轡は特選 石田きよし選

八十路なる吾が顔なでる秋日向

大崎石州

名月の夢を探索機ふち壊す

太田黒幸風

声明の渡る境内秋深し

大森康正

月今宵団子も供へ吟醸酒

川崎きこう

轡 声明の渡る境内秋深し

竹内雲泉

轡 名月や雑多煮込みの留守居酒

長池豆陽

轡 九天の雲よりいつる今日の月

藤田紀潮



お向かひを本籍として燕去ぬ

石田きよし





第二五八回北斗句会(令和六年十一月十三日)

五十音順 特選 石田きよし選

チヨモランマやロンブク寺に月冴える 大崎石州

黄金に萌え立つ尾瀬の草紅葉 太田黒幸風

秋の雲天使の筆の迷ひかな 大森康正

傘寿過ぎ友と緑酒や浜の秋 川崎きこう

隣りから一葉ふはり垣を超え 竹内雲泉

捕か放か壁と問答へこき虫 長池豆陽

刈田道あかね雲おく遠筑波 藤田紀潮



武装せし埴輪さやかに含む笑み 石田きよし



第二五九回北斗句会(令和六年十二月四日)

五十音順 特選 石田きよし選

冬將軍きたけりや来いと仁王尊 大崎石州

物価高もやしが威張る師走かな 太田黒幸風

柚子湯にて八十路の凝りを解しけり 大森康正

夕日背に家路急ぐや山眠る 川崎きこう

冬の川無事に渡れと六文銭 竹内雲泉

炙り絵めく野良着の母や冬の暮 長池豆陽

行く年や第九に揺るる秋津洲 藤田紀潮

仕舞ふもの探し出すもの冬支度 石田きよし



令和6年 自薦三句

北斗句会 自選三句（令和六年） 五十音順

（五年六月～六年五月の間の三十六句から）

歩くかも 石田きよし

八十路にも母恋ふこころ蜆汁
歩くかも知れぬ大根引つこ抜く
孫むすめと五手詰めを解く小春かな

シルクロード 大崎石州

哈密瓜はシルクロードの馳走かな
タクマラカン熱砂の果てに入日かな
行き行きてシルクロードの早星

柿若葉 太田黒幸風

天然の匠の極み柿若葉
天高しでんと座したる阿蘇五岳
背景に満開の花皆笑顔



森田光彦 画

1 / 3

北斗句会 自選三句（令和六年） 五十音順

初笑顔 大森康正

髭を剃り鏡に造る初笑顔
背中押し押されし友や入彼岸
晚鐘の渡る一村秋夕焼

優勝 川崎きごう

春場所や優勝攫ふ新入幕
孫と飲む大吟醸酒秋の宵
柿若葉妻とふたりの食に添へ

夏氷 竹内雲泉

妻の手に匙握らせて夏氷
芋粥の味引締めよ塩ひとつ
春陰や新聞今朝もいくさ記事



森田光彦 画

2 / 3

北斗句会 自選三句（令和六年）五十音順

茶飯事

田中資凡

厨跡らし路地裏の五月闇
秋の虹妻の声あり生きめやも
茶飯事と朝寝の妻の背をさすり

友

長池豆陽

兄の手の強き記憶や夜店の灯
逃避行を語りし友よ敗戦忌
打ち込みの強き友の書淑氣満つ

夏料理

藤田紀潮

ラムネ抜く気泡のなかにある昭和
白秋碑十重に二十重に赤とんぼ
夏料理 港横浜十五階



森田光彦 画

令和 7 年



第二六〇回北斗句会(令和七年一月九日)

五十音順 鶴は特選 石田きよし選

孫二人日々好日の初便り

大崎石州

鶴様々な出会ひと別れ除夜の鐘

太田黒幸風

絵文字入りメールで届く賀状かな

大森康正

美しき文字の年賀に恋ころ

川崎きこう

寒月や彼方に聞こゆ夜想曲

竹内雲泉

鶴煤払古き文束捨てきれず

長池豆陽

鶴冬日影子規を看取りし文机

藤田紀潮



癒えし身に満ちくる五感返り花

石田きよし



第二六一回北斗句会(令和七年二月六日)

五十音順 鶴は特選 石田きよし選

植木市三浦の郷に人の群れ

大崎石州

会えば又愛しさ募る冬薔薇

太田黒幸風

鶴盆梅と五十余年の絆かな

大森康正

寒中の会席膳や誕生日

川崎きこう

鶴ひとり膳焼きてほど良き藪の藎

竹内雲泉

行儀よく孵化を待つこと梅ふむ

長池豆陽

鶴後書きを先に読む薺菜の花忌

藤田紀潮



それぞれが何か言ひたげ干し大根

石田きよし





第二六二回北斗句会(令和七年三月五日)

五十音順 轡は特選 石田きよし選

桜観るたびに歳月かぞへけり

大崎石州

ひと叩き香り爽やか山椒の芽

太田黒幸風

轡 悪友と思ひ思はれ八十の春

大森康正

昼食の力うどんや二月尽

川崎きこう

轡 桃の花ひと枝供へ卒哭忌

竹内雲泉

轡 褪せつも微笑む雛や母の影

長池豆陽

官女雛ひとり性は悪女かも

藤田紀潮

生くるとは残さるること鳥雲に

石田きよし



第二六三回北斗句会(令和七年四月二日)

五十音順 轡は特選 石田きよし選

春の野の宵の寂しや吾一人

大崎石州

人襲ふ基地と化したる鴉の巢

太田黒幸風

和菓子屋の旗に魅かれて桜餅

大森康正

春の朝最上階の露天風呂

川崎きこう

気怠さを懐に入れ春の昼

竹内雲泉

轡 春の雷仏拝めと父の声

田中資凡

轡 畑打ちや寄り来る鳥の甘え声

長池豆陽

轡 屋形船しずかに分くる花筏

藤田紀潮

戦なき国にとどまる春の鴨

石田きよし

三月三十一日、北斗会花見俳句会が
国立博物館(上野)の九条館(貸切)で開催されました。
(十六名が参加、北斗句会は五名が出席) (別途報告)



第二六四回北斗句会(令和七年五月七日)

五十音順 轡は特選 石田きよし選

野仏に尿たれながら鳴く蛙

大崎石州

生命の息吹が聞こゆ五月かな

太田黒幸風

轡 老害を流さぬ自戒花は葉に

大森康正

清明や森も林も笑ひをり

川崎きこう

青鷺の気迫そこだけ時を止め

竹内雲泉

轡 散策やさつきつつじの色に酔ひ

田中資凡

轡 畑打や鎌の重みで韻を踏む

長池豆陽

葉桜や彰義隊士の影過る

藤田紀潮



ふらふらや漕ぎ手の来るをちつと待ち 石田きよし



第二六五回北斗句会(令和七年六月四日)

五十音順 轡は特選 石田きよし選

故郷の姿かはらぬ夏木立

大崎石州

轡 忍び寄る加齢の不安梅雨に入る

太田黒幸風

夏場所や故郷に笑顔大の里

大森康正

若葉風上総の海の碧きかな

川崎きこう

恥じらひや少し斜めの夏日傘

竹内雲泉

蔭を剥く妻と二人の昼下がり

田中資凡

轡 麗人めく艶の色香や初なすび

長池豆陽

轡 青山椒古道にのこる旅籠跡

藤田紀潮



けふ五千あすは万歩や夏帽子 石田きよし





第二六六回北斗句会(令和七年七月二日)(最終回)

五十首順 句は特選 石田きよし選

箱根山妻と和むや若葉風

大崎石州

一〇年間寝かせし梅酒いざ飲まん

太田黒幸風

笛の音に辿る祭の絵巻かな

大森康正

ミスターのプレイは天へ芒種かな

川崎きこう

暑 はや半年妻の仏前さくらんぼ

竹内雲泉

暑 炎昼の静寂破る救急車

田中資凡

夜を徹し語りし友よ夏の月

長池豆陽

暑 けろここに締め句会や半夏生

藤田紀潮



老鶯や老いのかけらも無き調べ

石田きよし



令和7年 自薦三句

北斗句会自選三句（令和七年） 五十音順

（六年六月～七年七月の間の四十二句から）

含む笑み 石田きよし

生きるとは残さること鳥雲に
それぞれが何か言いたげ干し大根
武装せし埴輪さやかに含む笑み

チヨモランマ 大崎石州

タクラマカン砂漠に独り月の友
ロンブク寺の鳥葬跡のうそ寒き
満天の星奔りたるチヨモランマ

梅 雨 太田黒幸風

忍び寄る加齢の不安梅雨に入る
長き夜や推敲重ね一句詠む
幸せは三代揃ふこどもの日



1

悪友 大森康正

悪友と思ひ思はれ八十の春
遡上する若鮎の影瀬に光る
声明の渡る境内秋深し

若葉風 川崎きこう

声明や森も林も笑ひをり
若葉風上総の海の碧きかな
夏場所や大和の綱へ大の里

同期会 竹内雲泉

同期会枝豆が出て話題替へ
読みかけてごきぶり叩く新聞紙
彼の人の月命日や涅槃西



2

破れ傘

田中資凡

春の雷仏拝めと父の声
二人して花の人手に酔ふ一日
境涯を埋もれて生き破れ傘

畑打ち

長池豆陽

行儀よく孵化を待つごと梅ふふむ
身のこなし鬼ごつこめく赤とんぼ
畑打ちや鍬の重みで韻を踏む

昭和の子

藤田紀潮

柿挽ぎて追はれたる日よ昭和の子
波のたりはてなくつづく土佐遍路
けふここに締め句会や半夏生

